「不思議の国」オマーンの思い出

1. はじめに

希望に満ちた2020年の始まりに冷水を浴びせるように発生したアメリカ軍によるイラン革命防衛隊最高司令長官殺害のニュースは我々に大きな衝撃と懸念を与えました。イランはこれに対する報復として、イラクに駐留する米軍基地へ反撃を行ったことにより、一時は第三次世界大戦の勃発も懸念されました。その後、両者による抑制的な対応で小康状態にありますが、偶発的な勃発を含めて両者の武力衝突の可能性は依然として高いまま残されています。

そんな中、中東において独自の外交路線で地域の和平推進を進めてきたオマーンのカブース国王が1月10日に79歳で逝去されました。同国王はサウジアラビアを盟主とする湾岸協力会議(GCC)のメンバーでありながら、一方ではイランとの関係も維持し、2016年にはアラブ諸国全体が敵視しているイスラエルの首相とも会談を行っています。同国王は複雑な歴史・文化・宗教等を背景に不安定が続く中東地域にあって、中立・中庸による和平を目指す善隣友好外交活動を推進してきました。50年間におよぶ同国王のこうした活動には、中東政界の重鎮として敬意が表されていました。

安倍首相はその逝去を悼み、「カブース国王の崩御の報に接し、深い悲しみを禁じえない。 謹んで哀悼の意を表する。国王は中東地域の平和と安定のために多大な貢献をされ、世界 各国から深い尊敬を集めた指導者であった。国王の崩御は国際社会にとって大きな損失で あり、オマーン国民の皆様がこの深い悲しみを乗り越えるにあたり、日本は常にオマーン と共にある」との談話を発表しています。

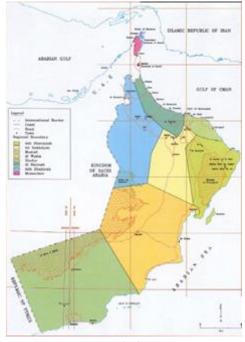
日本政府は、イランとオマーンの間に位置するホルムズ海峡を通過する日本商船隊の保護のための調査活動を目的として、海上自衛隊の護衛艦と哨戒機を派遣することを決めています。ホルムズ海峡は日本の輸入原油の80%以上が通過する日本の生命線ともいえる最重要な戦略拠点であります。今回派遣される日本の護衛艦は、オマーンとお隣のアラブ首長国連邦(U.A.E)をベースに活動することになるとしています。

かつてオマーンに若干の関わりがあった者として、日本の経済・安全保障上でも関係が 深いにも関わらずあまり知られていないオマーンについて、薄れつつある当時の記憶をた どりながら日本とオマーンの関係や同国の今後について展望してみたいと思います。

2. オマーン国の概要

オマーンはアラビア半島の東南端に位置し、アラビア海、オマーン湾そしてペルシャ(アラビア)湾に面した国です。石油資源に恵まれた湾岸諸国に比べるとオマーンの知名度は低いのが実態ですが、オマーンはこれらの諸国とは異彩を放つ魅力に富んだ国です。国土面積は約31万 Km2 と日本の約3/4であり、首都のマスカットは沖縄県那覇市とほぼ同じ緯度にあります。アラビア半島に位置していることから、砂漠や遊牧民の国というイメー

ジがあるかも知れませんが、実際は長い海岸線に沿った漁業や内陸部のオアシスや南部の 海岸平野での農業も盛んに営まれています。オマーンには冬季には雪に覆われるという富 士山に匹敵する高峰があり、南部ドファール地域ではモンスーン気候の恵みをうけた緑地 帯がみられるのはあまり知られていないと思います。



オマーン国全土図





首都マスカットの要塞とダウ船

農業や漁業以外では、過去にはヨーロッパ・中東と東洋の間に位置するという戦略的な位置を活用した中継貿易が盛んに行われていました。アラビアンナイト(千夜一夜物語)に出てくる「船乗りシンドバッド」はオマーンが舞台と言われており、大航海時代(16世紀)にポルトガルがインド洋へ到達したときにはオマーンの船乗りが水先案内を行ったとされています。マスカットにはポルトガルが築いた要塞が残されています。こうした時期に活躍したのはダウ船と呼ばれる100トン前後の木造帆船でした。17世紀にはアフリカ東岸のモンバサ(ケニア)やザンジバル島(タンガニカ)まで進出し、ザンジバルをオマーンの首都に遷都してオマーン帝国を樹立していています。

しかし、スエズ運河の開通や蒸気船の開発によりオマーンの優位性は徐々に失われ、やがて英国の保護領となってしまう。オマーンの近代化が始まるのは、前述したスルタン・カブースが父親を退位させ、国王に就任した 1970 年代に始まります。カブース国王は国内の石油やガス資源開発により得た資金を使って道路や港湾、学校、病院などのインフラ施設を積極的に整備して国の近代化に努めることになります。これは「オマーン・ルネッサンス」と呼ばれているものです。

3. オマーンの印象と現地での活動

私がオマーンを初めて訪れたのは1978年であり、まさにオマーンの近代化が始まる時期

でした。当時はオマーンには日本国大使館が設置されておらず、臨時代理大使が少数のスタッフとともにホテルの一室を借りて活動されていました。現地に事務所を開設している商社は2社のみで、現地の在留邦人の数も20名に満たなかったと記憶しています。日本政府によるオマーンへのODA事業は始まったばかりであり、オマーンの首都マスカットから北部へ延びるバチィナ地区の海岸平野における水資源の賦存調査とその活用について提案するための案件が実施されることになりました。私は当時同じアラビア湾岸のクウエートに駐在していましたが、上記の調査チームが現地での活動を開始するについて支援を行うためにオマーンを訪問しました。調査は約2年間に渡り続けられたが、その間に4~5回オマーンを訪問したと記憶しています。

初めてマスカット郊外にあるシーブ国際空港に着いてマスカット市街へ入った時の印象はとても新鮮でした。砂漠に囲まれたクウエートとはまったく異なる風景であり、市街地のすぐ背後まで荒々しい岩山が迫り、見事に植栽された海岸 (コーニッシュ) 道路が続く景色は何となく南欧的な印象でした。マスカットの奥にたたずむ王宮を見た時にはとても東洋的で神秘的な印象を受けました。聞くところによれば、道路や都市計画等のインフラ整備には多くの英国人が関わり、また王宮はインドの建設業者が施工したとのことであり、納得したのを覚えています。

マスカットの市街は徐々に西側の海岸線に沿って新市街の開発が進められており、そうした一部には地下トンネルにより水を運ぶイラン由来の灌漑施設である「ファラジ」が見られました。地下トンネルで水を運ぶことにより、強烈な太陽による蒸発散を防ぐことができる仕掛けです。一部の「ファラジ」には地上を進む開口部分があり、清らかな水が音を立てて流れていました。ニズワという地区を流れる「ファラジ」の水源は岩山の中腹から湧き出ており温水でした。こうした温かい灌漑水の中にもメダカのような小魚が泳いでいたのには驚きました。ここにもオマーンとイランの歴史的な結びつきが見て取れました。

また、南部のイエメーンに近いドファール地域の中心都市サラーラを訪問する機会がありました。ドファール地域は北部オマーンとは異なる文化圏であり、むしろイエメーンとの関係が深い地域です。当時は現在のような治安の悪化はみられず、牧歌的な山野が広がっていました。サラーラ地域はアラブ世界での生活に欠かせない「乳香」の産地として有名であり、また郊外には牛を飼って生活する部族がおり、その集落を訪ねる機会がありました。集落はサラーラ市街から後背地に広がる山岳地帯に展開しており、アフリカ的な体形の人々が独特の形をした家屋に牛と共に生活していました。サラーラ市内のホテルは海岸に近く、波打ち際を歩くと足の裏に浅蜊らしい二枚貝がうごめくのが感じられ、豊かな自然を感じたものです。現在は、サラーラ市の海岸地区では大規模な港湾開発が行われており、当時のようなのどかな風景は一変しているのではないかと思います。

オマーンでの休日には朝早く港の魚市場へ行き、新鮮なカツオやイセエビを買い込み、 ホテルの調理場を借りて刺身を作り調査団のメンバーと共に多いに楽しみました。ホテル では駐在地のクウエートでは手に入らないビールが飲めたことから、オマーン訪問の楽し みのひとつでした。

調査期間にはオマーン政府の職員(カウンターパート)と一緒に多くの関連政府機関の事務所や調査対象地域の現場を回りました。オマーンの人々の印象は湾岸諸国の人々に比べて自己主張が少なく控えめで協力的でした。お陰で調査は順調に進めることができました。また、カウンターパートに限らずオマーンでは極めて親日的な人が多く見られました。これは日本の家電製品や自動車の高い品質へのあこがれと、オマーン王族に日本人の血が流れていることが影響しているのかも知れません。オマーンを訪れる間に、私はオマーン王族のひとりと知り合う機会を得ました。カブース国王の叔父に繋がる家柄ということでしたが、政治には関与せずもっぱら実業界で活動したいということでした。オマーンの経済開発にも深い関心を示しており、オマーンのインフラ開発について意見を交わしたのを覚えています。大柄な体躯の堀の深い顔立ちで、流暢に英語を話す格好イイ若者でしたが、将来現地を訪問する機会があれば再開してみたいと思います。

3. 日本とオマーンの関係

これまでに書いたように、ホルムズ海峡は有名であっても日本とオマーンの関係は日本ではそれほど広く認識されていないと思います。しかし、カブース国王が日本をお手本にしてオマーンの近代化を進めたようにオマーンは親日的な国であり、それに応えるように日本政府や個人レベルでも多くの関係者がオマーンの開発に支援を行っています。

国際協力機構(JICA)はODA事業の一環として、全国道路網開発調査、全国港湾開発戦略調査、サラーラ港並びに周辺地域開発計画調査、産業振興マスタープラン、電力省エネルギーマスタープラン、等の技術協力を行っているほか、国際協力銀行(JBIC)によるソハール港建設計画やデュクム港のドライドック建設、発電所建設や海水淡水化プロジェクト等への資金協力が行われています。中でもソハール港とその後背地の工業団地はU.A.E.との国境まで90kmの至近距離にあり、日本を含む多くの外国企業が進出しています。南部のサラーラ港は欧州~アジア・極東間の中間地点におけるハブ港として大規模コンテナーターミナルの開発が進められるほか、クルーズ船の岸壁も整備されています。今回の海上自衛隊の護衛艦もこのサラーラ港を補給基地とすることが期待されているようです。

一方、民間の交流といった点ではオマーン王室には日本人の血が流れているというエピソードがあります。カブース国王の祖父にあたるタイムール国王殿下が退位した後に神戸を訪れ、そこで出会った大山清子さんと結婚したのです。二人の間にはブサイナ王女が誕生し、現在もオマーンで健在だということです。神戸新聞によれば、昨年10月25日に天皇陛下の即位を宣言する「即位礼正殿の儀」にオマーン政府を代表して出席したアスアド副首相兼国王特別代理らが兵庫県稲美町を訪れ、故大山清子さんのお墓参りを行ったとしています。こうしたことからオマーン王室と日本とは浅からぬ因縁があるようです。





故大山清子の墓参りをするオマーン一行 タイムール元国王と大山清子の写真

また、2011年3月に発生した東日本大震災の時には、オマーン政府より1000万米ドル の義援金や LNG の追加供給が行われているほか、福島県南相馬市にある浄水器メーカーに は合計26億円の発注があったということです。さらに、この発注には「注文した浄水器は まず被災地で活用して欲しい、オマーンへはその後で送って欲しい」という但し書きが付 いていたというから驚きです。ほかの国では聞かれない美談ではないでしょうか。

4. 今後の展望

今般のカブース国王の逝去にともないオマーン政府の政治体制の継承が気になるところ です。新国王には従弟にあたるハイサム文化遺産相(65 歳)が選出されており、カブース 国王の路線を承継するとみられています。ハイサム新国王はこれまで外務省次官やビジョ ン 2040 委員会委員長を務めてきており、王位就任にあたっては TV 演説で国民に向け、「カ ブース国王の足跡を継承し、他の国の内政に干渉することなく、人々と国家間の平和的共 存に基づく外交政策を採用し、すべての紛争に平和的で友好的な解決策を提供し、呼びか ける」と語っています。

しかし、権力の集中と強烈なカリスマ性で国の内外でリーダーシップを発揮してきたカ ブース国王が不在のなか、今後の国内統治や外交面で多くの試練が待ち構えていそうです。 オマーンでは多数の移民が長期間にわたり経済活動に従事しており、こうした移民の処遇 や限りのある石油やガス資源を見越した産業振興政策や人材育成計画など、取り組むべき 課題は多いと考えられています。

日本政府としては、アメリカとイランによる極度の緊張の中で実施された今回の安倍首 相の中東3か国歴訪において、オマーン訪問が図らずも新国王に直接弔意を伝える機会と なりました。日本とオマーンとの友好関係を増進し同国の発展に資するとともに、中東地 域の緊張緩和に向けて双方の取り組みを確認する極めて貴重な機会になったことは間違い ありません。今後はオマーンの重要性を一層認識しつつ、官民を挙げた協力体制を深めて 行くことが求められると思います。

参考資料:

「オマーンを知るための55章」松尾昌樹編著 明石書店、

https://www.kobe-np.co.jp/news/touban/201910/0012820395.shtml

https://search.yahoo.co.jp/search?p=%E3%82%AA%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%83

%B3%E3%80%80%E3%83%96%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%83%8A%E7%8E%8B%

E5%A5%B3%E3%81%AE%E5%86%99%E7%9C%9F&x=wrt&aq=-1&ai=9lGeqEw0TzeEl

JtF5DARlA&ts=22114&ei=UTF-8&fr=top_ga1_sa&mfb=P041